

# 文化運動としての中国農村再建運動

## ——中国晏陽初鄉村建設學院の事例研究

●胡 冬竹（上智大学大学院生）

### 1. 歴史的文脈から見る 中国の農村再建運動

近代以来、中国近代化のために犠牲にされてきた中国の農村は近代化がもたらした矛盾のたまり場でもある。中国社会の変化のプロセスの中で、農村問題、具体的に農村再建運動は常に重要な役割を果たしてきた。

1920年代から30年代までに、中国の山東省と河北省において、中国初めての大規模な農村再建運動が行われた。海外から帰ってきた留学生たちをはじめ、たくさんの知識人が農村に向かい、中国の近代化を推進させるために、農村再建運動に身を投じた。当時列強侵略の危機に晒される中国にとっては、「愚、貧、弱、私」の農村地域の変革が必要とされた。特に、国内都市部の近代化と海外列強から二重の搾取の下に置かれている農村地域のコミュニティ、農民個人の自覚意識が求められる。知識人たちが農村の伝統を意識しながら、近代的な教育思想、技術知識などを農村地域に導入して、農村地域の識字率と衛生教育などの普及を努めた。10年間ぐらいの実験で、各方面で多大な効果を上げた。その後の日本の侵略戦争によって、その壮大

な実験は事実上中止せざるを得ないことになったが、その10年間の実験から得た経験は、その後も第三世界地域の貧困問題を解決するプロセスの中でも生かされることになった。

中国国内においては、1949年に新中国が設立されてから、30年代の改良主義的な農村再建運動に代わって、国内の土地改革などによって、農村部も都市部も中国社会全般の社会的、政治的状况は大きく変容した。

1949年に新中国が成立してから、1978年のいわゆる「改革開放政策」が始まった時点まで、中国近代化においていわゆる原初的累積が急進的に行われてきた。このプロセスの中、当時の国際事情においては、急進的な工業化が必要であったため、農業は多大な犠牲を払うことを余儀なくされた。さらに1978年から今日に至り、中国は建国以来近代化の「第二の波」に巻き込まれつつ、グローバリゼーションの波に洗われている。「改革開放政策」の引き金にもなった中国農村の改革が20年近く実施されてきたが、さらに農村はグローバル化する経済過程に飲み込まれながら、徐々に「三農問題」（農民の貧困、農村の疲弊、農業の不振）として意識されるようになって来た。

農村地域の状況は深刻である。近代以来、中国は基本的には、耕地が限られる小農社会の条件の下で、近代化が進められてきた。しかも、近代化がもたらした矛盾を解消するに当たって、中国は植民地支配など外向けの方法を取れなかった。その結果、今日に至って、中国独自の近代化が進められるなかで、全ての矛盾を国内で解消しなければならない。近年、大量の農村人口が都市部に流出する一方、土地の徴用、農業税などをめぐって、農村に残る中国各地農民の抵抗運動が相次いでいる。それに対して、やはり歴史的な文脈を踏まえて、現実的な分析が求められる。

本調査は具体的な農村再建拠点——晏陽初鄉村建設學院の中国各地での研修と調査を通じ、今日における中国農村再建の実態に迫ることを目指す。1930年代の「農村再建運動」の経験は、今日の運動の中でも生かされている。

「東アジア共同体」構想に見られるように、今日、東

#### ■ 胡 冬竹（コ・トウチク）

上智大学大学院文学研究科  
新聞学専攻博士後期課程  
東アジア文化論  
近年、日本、台湾、中国大陸でのテント芝居、ドキュメンタリー映画の翻訳紹介など、表現活動に媒介される東アジア各地域民衆の新たな連帯を注目する。



#### ● 研修テーマ

文化運動としての中国農村再建運動  
——中国晏陽初鄉村建設學院の事例研究  
研修先：中国

#### ● 助成金額

2007年度 65万円



郷村建設学院の唐辛子畑

アジアでの繋がりを語る際には、経済先行のケースが多く見られる。中国の農村問題を語るときも、直接的な農業技術支援など、短期的で「目に見える」援助が議論の土台に上っている。しかし、経済的なモメントや制度改革のモメント以外の要素というもの——例えば、文化的な基盤の再生産が農村コミュニティにおいて何を意味するのかなど、十分に認識されていないように思われる。

より根本的に農民たちの主体性を再構築して、農村再建を進めるために、グローバル化に翻弄される農村に残る農民たち、とくに女性、老人、子供などマイノリティコミュニティを文化的活動を通して、伝統に基づく人間の再建を目指し、それによって新たな人間と人間、人間と土地との「品格ある連帯」を促進する働きに注目してみたい。連帯を深めることが極めて重要かつ緊急的な課題だと考えられる。

そして最終的な目標は、目下の急進的な近代化過程の中、農村地域の人たちがいままでの文化資源を利用しつつ、いかに自分なりの持続的発展の道を作ろうとしているのか、文化の再生産にかかわる議論を深めることである。

## 2. 研修内容

### 「分離式エコトイレ」の建設

郷村学院は伝統的な生活、労働習慣を蘇らせることと同時に、新たなエコ技術も取り入れて、各地でエコトイレの実験建設を行ってきた。天然の素材、持続的に土に還元できるシステムは水不足の農村地域で地元の人たちを納得させた。

エコトイレの基本的な発想は、人間の排泄物の固体の大便と液体の小便を分けて集積することによって、においを防ぐことができると同時に、乾燥させた大便は3ヶ月後に有機肥料として使うことができ、分離された小便は7日後に、野菜畑の肥料にもなる。地元で



分離式のエコロジートイレ

手に入りやすい草、泥など天然素材で作ることによって、建設のコストは大幅に下げることができた。市販の資材で作ると2万人民元（およそ30万円）もかかってしまうのに対して、村にすでにある天然素材では2千人民元（およそ3万円）で済み、コストの削減ができた。

最初に村民たちは、都市部で使われている「近代的」トイレを憧れたが、「分離式エコトイレ」の建設によって、水流しの必要がなく、有機肥料として循環できるプロセスを体験することで、伝統の農村生活の発想にもう一度目を向けて、現在のグローバル化に抵抗する想像力が芽生えた。

### テント芝居

2007年9月に、学院のメンバーは北京近郊に提携関係がある「皮村」という村にエコトイレを建設するときに、テント芝居を通して村の人たちとの関係作りにも挑戦した。

『変幻<sup>かきか</sup>瘡蓋城』というタイトルのテント芝居は、比喩的な手法で、「近代」が「瘡蓋」のように、人間社会に付着しており、それを不断に剥がす作業のプロセスの中から現している葛藤を問うもので、中国、日本、台湾、朝鮮、沖縄など東アジア各地からの人たちの共同作業によって実現されたものであった。

テント芝居は普通の劇場の中で行われる芝居と違って、表現する側の役者、製作の人たち、観客など全ての人たちは一緒に手作業で表現空間としてのテントを建てることによって、新しい関係性が共有できる「場」を目指す。

中国では、1949年以降、いろいろなかたちで農村に芸術表現を持っていく動きがあった。山村映写隊、話劇宣伝隊など、芸術表現の領域において、芸術関係者たちは積極的に農村に足を運んで、農村の風土から創作の養分を吸収しながら、豊かな芸術表現を農村の人たちに還元することで生産的な関係性を結ぶことがで

きた。

しかし、改革開放から30年、市場経済、とくに近年グローバル化によって知識人、芸術関係者と農村の人たちとの関係性が蝕まれることになった。そこで、新たな「農村再建運動」のなかで、知識人たちがもう一度芸術表現を媒介にして、農村地域の人たちとの関係性を取り戻すこと、あるいは、作り直すことを試みた。

実際、初め半信半疑の村民たちは、テントを建てる共同作業に参加することによって徐々に互いの関係性を気づくようになった。実際の公演のときも、ちょっと「インテリ的な」芝居にも共感を持つようになった。

2日間にわたった公演の観客は主に村の住民たちと地方からの出稼ぎ労働者であった。家族連れで、テントの中で東アジア各地から集まった役者によって演出された空間を体験することは、今の中国の農村再建運動の中で、農村の人たちが外部からの人たちと新たな関係性を作り、自分たちの主体性を見直すきっかけにもなるかもしれない。それはさらに、グローバル化によって疲弊している農村コミュニティ全体の再建につながることも期待できる。

### 3. 今後の課題

私自身は中国大陸出身の人間として、日本での留学経験を通して、正確に言えば「日本を経由」して、台

湾、韓国に渡って、日本と中国、日本とアジアの関係を再発見し、以前と違う次元で再び出会うことになった。そして、それによって、中国の現実を見直したプロセスのなかで、中国農村再建運動と出会って、それこそいまの中国の農村問題をはじめ、すべての問題に介入するにはとても有効なアプローチであることを気づくようになった。要するに、新たな歴史的条件の下で、農村再建運動の中で新たな「抵抗精神」が芽生え、それは昔から今日に至る東アジア各地域における、連動した土地と人間の関係性の一環として考えられる。

新たな国際的、国内環境を前にして生まれた中国での農村再建運動の経験を、具体的な東アジア各地域間の関係性を築くことのきっかけにしたいと考えている。グローバル化によって無理矢理に「つなげられた」各地の民衆は、やはり自分の主体性を重んじて、国家政府間の経済発展を軸にする発想と違う位相で、新たな連帯を求めなければならない。流動的状況に置かれている中国の農村再建運動に大いに期待したい。

機会があれば、調査研究も継続したいと希望している。

農村再建運動の中で、特に都市部と農村の隣接部に位置して、村本来の住民と出稼ぎ労働者たちが混在して共に生活している村の実態をさらに調査したい。その実態の把握は、中国の現実、さらに東アジアの現実への接近の有効な切り口として考えられる。